

タクシーのご用命は0120-148-512登山ハイヤーへ

箱根観光情報新聞
2024冬号第一版
令和6年12月16日発行
企画制作
箱根観光情報研究会
協力
箱根モビリティサービス㈱
制作責任者: 美馬 哲
発行部数: 700部

無料

ご自由にお持ちください

箱根観光情報研究会

箱根観光情報新聞

箱根駅伝のコースを楽しむ

箱根のお正月を代表する恒例行事と言えば「箱根駅伝」だ。正式には「東京箱根間往復大学駅伝競走」と言う。第一回が開催されたのは一九二〇年。来年は一〇一回目となる文字通り歴史のある恒例行事だ。

今回は、この駅伝のコースである国道一号线を辿る観光タクシーを紹介する。箱根湯本駅を出発すると

環翠楼、一乃湯本館などの歴史的な建物が視界に入ってくる。古い旅館が多い箱根らしい風景。浮世絵にも描かれている場所だ。

宮ノ下で国道一号线は左に直角に曲がるが、ここで富士屋ホテルに立ち寄り、館内のミュージアムとギャラリーを見学する。歴代の社長の写真や当時使われていた備品や調度品、年表な



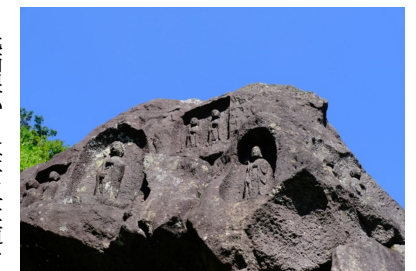
どの資料が展示されているので、歴史に興味のある方にはお薦めだ。

二階バルコニーからは富士屋ホテルを構成する本館、花御殿、西洋館、食堂棟を見ることが出来る。時間があれば富士屋ホテル周辺の街並みの散策も楽しい。

富士屋ホテルの後には「小涌谷踏切」、一号线最高点八七四メートルの標識を過ぎる。その先で車を降り、二十五菩薩を見学しよう。

一九九三年に彫られた石仏群だ。東側の岩に三体、西側の岩に二三体の石仏が並んでいる。七〇年前はこの周辺は噴煙が上がっており、旅の安全を祈願して彫られたものらしい。

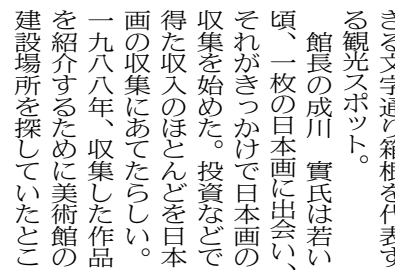
少し足を延ばせば、三・二メートルの巨大な六道地藏の姿も見ることが出来る。二十五菩薩を楽しんだ後は元箱根までの標高差一五〇メートルを一気に下る。



元箱根からは平坦な道を進み、箱根町港の交差点を右に曲がると往路のゴール。ゴール横の「箱根駅伝ミュージアム」に入館しよう。

「箱根駅伝」のこれまでの写真や記録、関係資料などを集めた唯一の駅伝の博物館だ。「箱根駅伝ミュージアム」を楽しんだら、旧道経由で箱根湯本まで下る。

各地点での滞在時間にもよるが、二時間三〇分前後の行程だ。他にもお薦めの場所があるので、乗務員に相談すると良いだろう。



箱根は沢山の美術館があることで知られているが、ラウンジで富士山の眺望を楽しめる美術館は一つしかない。現代日本画四〇〇〇点を収蔵する美術館として一九八八年に箱根に開館した成川美術館だ。収蔵作品の中には有名な平山郁夫の作品四〇点も含まれており、気軽に日本の名画を堪能できる文字通り箱根を代表する観光スポット。

館長の成川 實氏は若い頃、一枚の日本画に出会い、それがきっかけで日本画の収集を始めた。投資などで得た収入のほとんどを日本画の収集にあてたらしい。一九八八年、収集した作品を紹介するために美術館の建設場所を探していたところ、出会ったのが風光明媚で知られるこの元箱根の地だった。日本画を紹介するのにこれ以上相応しい場所はないとも言われる絶景の地だ。その美術館一階の芦ノ湖に面した場所にカフェとラウンジをレイアウト。



成川美術館
日本画と富士山の眺望を楽しむ

写真提供: 成川美術館



写真提供: 成川美術館

晴れていれば、大きな窓から背後に名峰富士、右端に平和の鳥居を従えた芦ノ湖の眺望を楽しむことができる。特に、白い雪の衣を纏った富士山と赤い平和の鳥居、青々とした湖水を湛える芦ノ湖の姿は名画を観ているようだ。

展示会は年に三度、展示替えを行い、収蔵している秀作の紹介をしている。

また、同美術館は二〇一二年には一般財団法人成川

写真提供
成川美術館

美術財団を設立し、日本画作品の調査研究や作家の育成・支援に力を入れていることでも知られている。

カフェ ティーラウンジ「季節風」では軽食もいただけるが、お薦めなのが期間限定の抹茶セット。

一年に四回、上菓子家が桜・桃・栗・椿に替わり、季節にあつた味覚が楽しめるのだ。現代日本画を堪能した後はティーラウンジで富士山の絶景を眺めながら季節感たつぷりなスイーツで舌鼓を打つのも楽しいだろう。



名店訪問 Amancoffee

透明感のある珈琲が楽しめる



今年の七月、本紙編集長が行きつけのカフェのマスターからお客様を紹介された。このお店ではよくある光景なのだが、今回は「うちの珈琲豆はこのお店から仕入れている。今度、仙石原にお店を出すらしいから取材してみたら。」とアドバイスが。実は編集長行きつけのカフェは山の中にあるのに海外からもお客様がお越しになる箱根の隠れた名店。このお店の珈琲豆を提供しているお店ならば、美味しいはずと言ったことで取材させていただいた。

お店の名前は「Amancoffee」。

場所：宮ノ下から御殿場に向かう国道一三八号線沿



い仙石原交差点の少し御殿場寄りの左側。木の板に控えめに手書きで「Coffee Pあり」と書いてあるだけなので、注意しないと見落としてしまいそう。CoffeeのOが珈琲豆にデザインされているのが可愛い。お店は古民家をマスターがセルフリノベーションした手作り感たつぷりのお洒落な空間だ。店内は木を基調にしたインテリアでまとめられていて落ち着いた雰囲気。

マスターは小田原のご出身で、一〇年以上前に小田原が本店のAmancoffeeに出会い、その魅力に惹かれたらしい。その後、箱根でコーヒーハウスや日本茶専門店の運営に携わった後、古民家を見つけ、今年七月にこのお店をオープン。

お客様に喜んでいただくのが目標とのことだ。

Amancoffeeは珈琲

豆の産地や生産者にこだわりの、仕入れた豆に最適な焙煎方法にこだわってハンドドリップでクリーンな透明感のある珈琲の提供するコーヒーハウス。

マスターの話ではハンドドリップは日本で育まれた抽出方法で、一杯ずつ丁寧に淹れる方法は茶道の精神も影響していると言われており、最近では海外のお客様にも人気があるらしい。こだわりの珈琲を堪能したい方にはお薦めのお店だ。



豆の産地や生産者にこだわりの、仕入れた豆に最適な焙煎方法にこだわってハンドドリップでクリーンな透明感のある珈琲の提供するコーヒーハウス。

マスターの話ではハンドドリップは日本で育まれた抽出方法で、一杯ずつ丁寧に淹れる方法は茶道の精神も影響していると言われており、最近では海外のお客様にも人気があるらしい。こだわりの珈琲を堪能したい方にはお薦めのお店だ。

本紙は創刊当時からお客様や観光案内所のご担当者から外国語版を作るようご要望をいただいていた。

しかし、本紙は編集長が公休日に対応しているため、外国語版用のレイアウトを用意したり、翻訳する作業を行う余裕はない。ちなみに本紙編集長はジャパニー

ズオンリー。ご要望をいただくたびに「将来、ホームページを開設したら考えます。」と回答していた。

しかし、今年七月二〇日のホームページ開設後はこの言い訳ができなくなったため、外国語対応を検討しなければならなくなった。

そんなある日、GOOGLE翻訳ページの中に「ウェブページ」と書かれたボタンがあることに気が付いた。

試しに、箱根観光情報新聞のホームページのURLを入力、元の言語と翻訳したい言語を選択すると一瞬でページ全体が翻訳できることが確認できた。

一部固有名詞の表現に違和感があったり、ページ毎に翻訳する必要はあるものの、一瞬で世界中の言語に翻訳できる優れたもの。この機能は是非外国人の方にも使っていたら、本紙の情報にアクセスして欲しい。



本紙ではお客様にできる限り正確に情報をお伝えするよう努力しておりますが、紙面の都合上、お店の場所や営業日、営業時間などの詳細をお伝え出来ない場合がございます。お手数をおかけしますが、訪問される前にお店や施設のホームページなどで営業日、営業時間などをご確認ください。よろしくお願いいたします。

本紙は二月一日に無事創刊五周年を迎えることができました。取材や配布、情報提供などご協力いただいた皆様のご協力の賜物と感謝しております。

今後も箱根の観光情報を発信して参りたいと考えておりますので、どうか宜しくお願いいたします。

なお、左記QRコードで過去の記事や画像、編集長の思い出などを紹介した本紙ホームページにアクセスできるのでお試しください。



箱根観光情報新聞QRコード

箱根に観光に来たけれど
「どこを見たらいいかわからない。」
「効率的に観光したいけれど・・・。」
とお悩みのあなた
箱根観光は登山ハイヤーがお薦めです。

今すぐ
0120-148-512(携帯OK)へ

